

P-11

「介護保険制度など環境の変化にともなう特養老人ホームにおけるレクリエーション・プログラムの変遷と今後の課題」

○萬井¹⁾ 瑩子（福祉レクリエーション・ワーカー） マーレー寛子（平安女学院大学）

A特別養護老人ホームで集団レクリエーション活動のプログラムを提供しはじめて14年が経過した。その間、入居者の顔ぶれも職員の顔ぶれも相当かわっていき、施設を利用する人たちが重度化するにつれてプログラム内容もかなり変化していった。2000年介護保険制度の導入により、Aホームのような従来型施設でもユニットケアの試みがなされた。そのためにレクリエーション活動の場所の確保が難しい時期が続いた。また介護報酬改正で職員の配置が少なくなり、業務におわれる職員に余裕がなくなってレクリエーション活動への参加、協力も減り、レクリエーションのもつ機能に対する認識がさまざまになってきた。レクリエーション活動の中では日頃はケアする側とケアされる側がそれぞれの立場を忘れて、楽しい場を共有し、共感しあう仲間としての関係を築き上げていく。利用者にとって安心の場の提供でもある。一人ひとりがよりよく生きるためのレクリエーション援助はこういった変化の中、どういう方向をめざせばいいのかこれからの課題である。

P-12

花と緑のまちづくりにおける地域住民の認識に関する研究
～長野県小布施町を事例として～

○朝日 隆太（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
麻生 恵（東京農業大学地域環境科学部）

本研究の対象地である長野県小布施町は良好な景観の形成に関する「環境デザイン基準」を策定しており、景観・まちに関して意識が高く、まちづくりについては全国でも高く評価を受けている。この地は、昭和51年に北斎館が開設されたことによって観光客が訪れるようになり、現在のまちづくりを行うきっかけとなっている。その中で、地域住民は小布施町を住みやすくするという目的のもとに「花づくり」という花によるまちづくりを前唐沢町長の発案により、昭和55年から積極的に行っている。そこで、本研究では小布施町において花づくりがどのような仕組みになっているのかを解明した。また、花づくりによって作られた地域花壇・オープンガーデンの場所を地図にプロットし、量・面積をもとに3つのゾーンを組み、空間把握をした後に地域住民はその空間をどのように認識しているのが把握できた。それらを踏まえ、今後小布施町を事例にして、これからのまちづくりの手法の一つとして、他の市町村等が花を使いまちの修景効果を高める際の指針（知見）を導くことを目的とした。